（資料紹介）青銅器・晉侯鳥獸尊

末次信行

キーワード：西周・青銅器・祭器・盛酒器・鳥獸合體（キジ科のトリとゾウ）・列尊・晉侯・向大室・宍室・キメラ風・顧首鳥尊

一、はじめに

報告者は、現在、某プライベートコレクションを調査中である。プライベートコレクションであるから「愛玩」を主たる目的とする收集品であるが、中に歷史的文物もふくまれる。報告者は、中國古代史を長年にわたり研究してきた經緯から、研究に値する、すなわち歷史學・考古學・神話學・美術史學上で、學術的價値を有すると判斷した收集品については、公表すべき使命があると考えている。

こうした趣旨から、青銅器A・Bを紹介したい。

なお、青銅器A・Bはともに非發掘品であり、科學的檢査（青銅器の成分分析など）を經ていないので、眞僞については未確定としておく。また、イミテーションか否かについても同樣である。ここでは、他例（同類の青銅器）との比較、文獻や卜辭史料からの檢討、加えて目視と摩挲（触感）にもとづき報告する。

二、青銅器A・Bの器制（器種・器形・スケール）と銘文

i．青銅器A・Bの器制（器種・器形・スケール）

青銅器Aの器制については、青銅器Aの寫眞（左側正面・右側正面・前方正面・後方正面・左象首部分・右象首部分）を參照しながら解説したい。

《器種名》　器種は蓋の銘文（後出）から、いわゆる自名ならびに器形から「尊」となる。祭器（盛酒器）である。

《器形》　器形は鳥を主體とし、象首を從とする。鳥獸合體の形態である。

器形の主體である鳥は、本體は前向きで、頭首のみが後ろを振り向く形をとる。ここから顧首鳥尊とか回首鳥尊と稱される。

鳥の頭頂部には冠羽がつく。冠羽は立てた芋形をしている。この芋形の外側のラインに添いながら、人の指紋狀に細線が施されている。嘴上の後部分には兩鼻孔がある。眼は圓眼である。圓眼の中心に睛らしき點があり、圓眼の外側の周圍は、帶がとりまく。この帶は連續す

る臺形模様からなる。さらにその上部には、それらを取り圍むように鉤形眉（鎌形の眉）がみえる。鳥の首から胸の下までは鱗紋で覆われている（寫眞・前方正面）。

兩翼は、ともに先が上方向に巻き上げられ、兩翼の元の方は大きな圓い渦巻狀の紋様があるが、よく觀察すると、この大圓は、二本の渦巻きが絡み合う、二巴紋様となっている。この二本の渦巻きは、右翼の方が左巻き、左翼の方が右巻きである。大圓の渦巻きの外側の一本は、翼の先端まで延びており、その周圍の翼部分には大きめの雷紋（雲紋）が施されている。[1]

また、翼と蓋との間の胴部分には、雷紋地にやや幅廣の羽根紋（刀紋）が四本みられる。

尾翼には四筋の羽根模様があり、各筋は三つの眼狀斑（目玉模様）などからなる。これらの目玉模様を「皇」字模様とする説もあるが、[2]キジ科（クジャクなど）の尾羽根の眼狀斑を圖案化したようにもみえる。

器全體は二本の鳥脚と支柱の象首に支えられている。二本の鳥脚の足の指は、ともに三趾であり、脚の中程後方には蹴爪が出ている。象首の支柱は、象眼部分が凸として、象牙部分が凹として造形され、眼と牙のまわりには雷紋の一種が施され、長い鼻には皺が模様化されたらしい波紋あるいは魚鱗紋がみえる。

鳥の背上には蓋がある。蓋は鱗紋に覆われており、中央部分に鈕がつく。鈕は一羽の鳥の形に造形されている。

すでに記したように、全體からみると、鳥獸合體の形態であるが、「鳥獸」の鳥は、頭頂部の冠羽、圓眼、脚にある蹴爪、尾翼にみえる眼狀斑などの特徴から、いわゆる山鷄やクジャクなどのキジ科のトリがモデルになったらしい。[3]「鳥獸」の獸は、象首すなわちゾウの頭部から長い鼻がモデルであることはまちがいない。

これらを要するに、青銅器Aは「鳥と象の合體した神像」となるが、全體のバランスを考慮すると鳥の方の神格が高く、象は付屬的とみられる。

《スケール》青銅器Aのスケールは、全長30.0cm・全幅16.0cm・全高37.4cm、重量は約5.4kgであり、蓋は縦10.3cm・横8.3cmである。

青銅器Bは、青銅器Aとほぼ相似形をなす。スケールは全長15.0cm・全幅7.0cm・全高19.0cm、重量は約0.9kgであり、蓋は縦5.7cm・横4.6cmである。寫眞參照。

ii. 銘文

青銅器Aの銘文は、蓋の裏に鑄込まれている。銘文の寫眞によって明らかなように、二行六字（各行三字）で「晉侯作宴室寶隣彝」と讀める。

「宴」に字形を定めることについては、陳夢家説を參考とした。甲骨文字にみえる宗廟關連文字に、當該文字に近い字形として「矣」「夬」「寑」の三字形を指摘し、宗廟などの建築物を意味するとの陳夢家説である。[4]ただ、「宴室」が、そのまま陳夢家説の「寑」すなわち「矢（側）室」の異體字として通じるか否かについては、斷定しがたい。ちなみ

に、青銅器Aの銘文中「晉侯」の「侯」字の「矢」の部分の字形をみると、「大」になっている。字形に對する寬容性がみられる。この文字鑄造の「感覺」からすると、「寘」の「吳（𠙵）」部分の「口」は、「日」の異體字とも推定しうる。あるいは、「虞室」説なども想定されるかも知れない。また、「寘」を二字に解し「向大室」と讀む説も、すでに提出されている。(5)

いずれにせよ、この銘文は、晉侯が寘室に收容すべき祭器（寶尊彝）を作った、と讀める。晉侯が執り行う重要祭儀に用いるための寶器を鑄造したと解せられる。

青銅器Bは、青銅器Aとほぼ相似形をなし、蓋の銘文も同じである（各寫眞參照）。

三、青銅器A・Bの鑄造年代

山西省北趙晉侯墓地第六次發掘でM114から出土した「晉侯鳥尊（M114:210）」は、殘長30.5cm・全幅17.5cm・全高39.0cm（重量不記）で、青銅器A・Bと器形が酷似し、蓋銘も同樣である。(6)

鳥尊（M114:210）の出土したM114の造營は、晉侯墓地中で最も早いとされ、晉侯燮の墓と推測されている。晉侯燮は、西周の成王（前1042～前1021）の弟である唐叔虞の子であるから、康王（前1020～前996）・昭王（前995～前977）の時代に活躍したと推測される。つまり、西周早期中期がM114の造營の下限となる。したがって、「晉侯鳥尊（M114:210）」も、この時代の鑄造が下限と推測される。

青銅器A・Bの鑄造年代も、ほぼこれと同時期（西周早期中期）に造られたにちがいない。

ちなみに、M114の造營が晉侯墓地中で最も早く、晉侯燮の墓と推測される、この理由・根據については、張懋鎔論文（「晉侯墓地文化解讀三題」『晉侯墓地出土青銅器國際學術研討會論文集』上海書畫出版社、二〇〇二年）が分かりやすい。

北趙晉侯墓地におけるM114とM9の造營早晩關係については、簡報（「天馬—曲村遺址北趙晉侯墓地第六次發掘」『文物』二〇〇一年第八期）では人骨の放射性炭素C14測年結果待ちとする。(7)これに對して、張懋鎔論文は、M114が晉侯墓地中で最も早く造成されたとし、判斷材料に陶鬲・方鼎・葬俗をあげる。M114が晉侯墓地中、唯一、殉人のみえる晉侯墓であること、殷代に流行した方鼎の出土などから、殷文化の影響を受けていることなどを指摘する。

なお、鳥尊（M114:210）の鑄造年代について、林巳奈夫（「中國古代の太陽紋の德の圖象」『泉屋博古館紀要』第二〇卷、二〇〇四年）は、陶生剛の春秋中期～晚期説（「晉國鳥紋的再研究」前掲『晉侯墓地出土青銅器國際學術研討會論文集』）を參考に春秋中期とする。器形による年代判定らしいが、考古美術史上、一考に値する。

四、贅語

青銅器A・Bについて、報告者が歷史的文物として學術的價值を有すると判斷した具體的な事項について整理しておく。

一つは、青銅器A・Bの蓋の銘文は、二行六字（各行三字）で「晉侯作寘室寶隮彝」に讀める、という銘文解讀上の問題提起である。

また一つは、列尊という指摘である。

三器のスケールはつぎの通り。

○晉侯鳥尊（M114:210）　殘長 30.5cm・全幅 17.5cm・全高 39.0cm
○青銅器A　全長 30.0cm・全幅 16.0cm・全高 37.4cm
○青銅器B　全長 15.0cm・全幅 7.0cm・全高 19.0cm

これらは、蓋の銘文を同じくし、相似形である。したがって、青銅器A・Bと「晉侯鳥尊（M114:210）」は、列尊（器數不明）を形成する三器と推測される。いずれも銘文に寢室とあり、宗廟建築物との關連からの推測である。葬制（副葬品）とは無關係としておく。ちなみに、列鼎（炊煮器）の出土例は、殷前期（鄭州期）からあり、また傳説上では「禹の九鼎」があるが[8]、西周の列尊（盛酒器）については、類例が少ないように感じる[9]。當該青銅器は、列尊の系譜を考えるうえで貴重な史料と判斷できる。なお、「六尊」という言葉が、『周禮』春官・小宗伯にみえるが、これらは「獻尊・象尊・壺尊・著尊・大尊・山尊」であり、形態の異なる六種の尊とされる。

また一つは、これらの造形上の問題である。第六次發掘簡報に「造型極爲生動」と指摘されるように、リアルであり生き生きしている。リアルでありながら、眼狀斑（目玉模様）のある尾翼の下は、象の頭部からなる鳥象合體の形態をとる。これは、現世の生き物ではなく、神獸とされたにちがいない。この點、比較神話學の史料ともなりうる。なお、鳥獸合體尊の例としては、台北の故宮博物院の所藏品に「鳥首獸尊」があり、春秋時代のものとされる[10]。

さらに一つは、製作年代の問題である。晉侯鳥尊（M114:210）と青銅器A・Bの三器の鑄造が、墓葬年代からは西周早中期とされるのに對して、圖像や造形の觀點からは、春秋中期～晩期とされる問題である。この報告で明確にした「鳥と象の合體した神像」という觀點を考慮すると、西周早期の可能性が高いが、確證になるとはいえない。

なお、青銅器A・Bの出土地點については不明である。また、明器か實用器かの問題も殘される。

以上、この報告が諸學・諸分野の學術的史料として參考になれば幸いである。

注

（1）容庚は當該紋様について雷紋の一種（「兩端向內回轉」例）とする。雷紋が閃光（稻光）を象る、甲骨文字の「申」が元の形であるとする説である。『商周彝器通考』上・第六章花紋「雷紋」（哈佛燕京學社、一九四一年）にみえる。なお、『中國文物考古辭典』（遼寧科學技術出版社、一九九三年）の「雲雷紋」の項には、連續する渦巻きで構成される幾何模様（以連續的回旋形線條構成幾何圖形）を「雲雷紋」とし、圓形のそれを「雲紋」、方形のそれを「雷紋」とする。また、林巳奈夫は「竝列ワ字形羽渦紋」と命名する（『殷周時代青銅器紋様の研究（綜覽二）』一八一頁、吉川弘文館、一九八六年）。

（2）林巳奈夫「中國古代の太陽紋の德の圖象」（『泉屋博古館紀要』第二〇巻、二〇〇四年）參照。

（3）「山鷄」については、陶生剛「晉國鳥紋的再研究」（『晉侯墓地出土青銅器國際學術研討會論文集』上海書畫出版社、二〇〇二年）參照。

（4）『殷虚卜辭綜述』（科學出版社、一九五六年）第十三章「廟號下」に「宾」の甲骨文字例として「宾」「宾」「宾」の三文字を同じ意味として指摘する。つまり、「宀」内の字形が「矢」であれ「大」であれ「尸」であれ、同じ「宾」の意味に解するのである。字形の一點一畫に拘るのではなく、

文脈上「側」という原義が三者に通用するとの文字學の方法をとる。

（5）佐藤信彌「金文通解・叔矢方鼎」（『漢字學研究』第七號、二〇一九年）の「b晉侯鳥尊」參照。

（6）晉侯墓地概要については、佐藤信彌「金文通解・晉侯蘇鐘」（『漢字學研究』第四號、二〇一六年）の「參考・北趙晉侯墓地について」參照。また、晉侯鳥尊（M114:210）については、同右論文參照。

（7）簡報の「三、結語」に「從墓葬形制以及出土器物特徵來看、M114、M113是晉侯墓地中較早的一組墓葬、其時代約在西周早中期之際」とするも、「M114、M113組和先前排在第一位的M9、M13組墓最接近、…最早的兩組墓葬。當前的關鍵問題是判斷M114、M113組和M9、M13組的早晚關係、…目前很難進行有効的對比」とあり、歯切れが悪い。要するにM114組とM9、M13組の早晩關係は、この簡報の段階では不明ということである。なお、考古所説（中國社會科學院考古研究所『中國考古學・兩周卷』九六～九七頁、中國社會科學出版社、二〇〇四年）では、M114を最早とするも、墓主については、唐叔虞か晉侯燮のいずれかとする説となっている。

（8）大鼎四器が、鄭州南順城街窖藏坑H1から出土している。河南省文物考古研究所他『鄭州商代銅器窖藏』（科學出版社、一九九九年）參照。また、「禹の九鼎」については、小南一郎『古代中國・天命と青銅器』（京都大學出版會、二〇〇六年）參照。

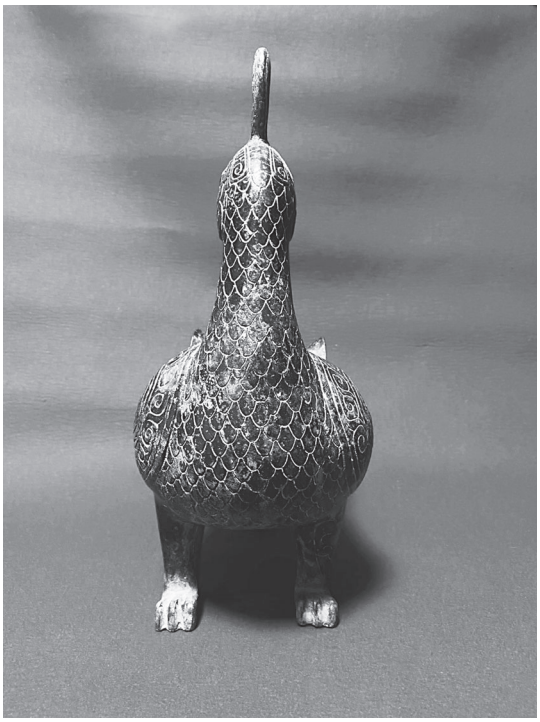
（9）殷墟「婦好墓」出土（殷後期）の酒器は、禮器（二一〇件）の七四％（一五六件）を占める（中國社會科學院考古學研究所『殷墟婦好墓』文物出版社、一九八〇年）。また、盛酒器の例として、殷墟出土と傳えられる三器一組の方彝、根津美術館のいわゆる高射砲三器がある。殷の紂王が酒で國を滅ぼしたのを教訓とする周との違いがあるのかも知れない（『尚書』周書「酒誥」參照）。

（10）容庚『商周彝器通考』上編四三二頁。また、林巳奈夫『春秋戰國時代青銅器の研究（綜覽三）』（吉川弘文館、一九八九年）器影圖版九九頁の「鳥獸形尊3」にみえ春秋ⅢBとする。

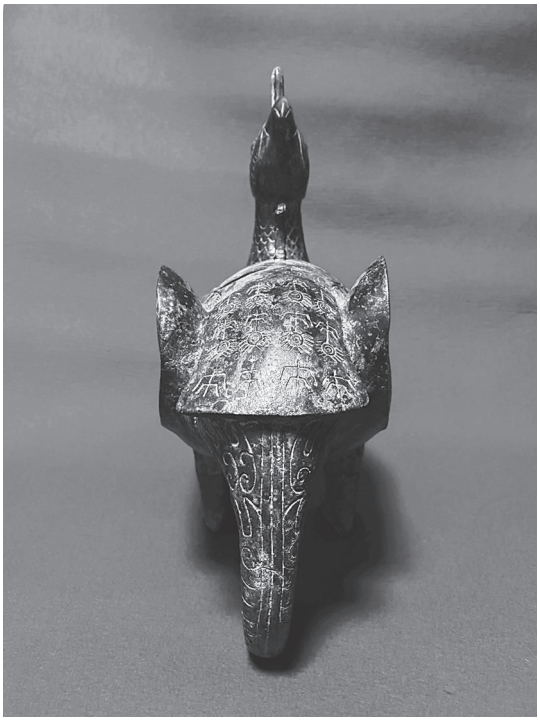
（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員）

青銅器 A 左側正面

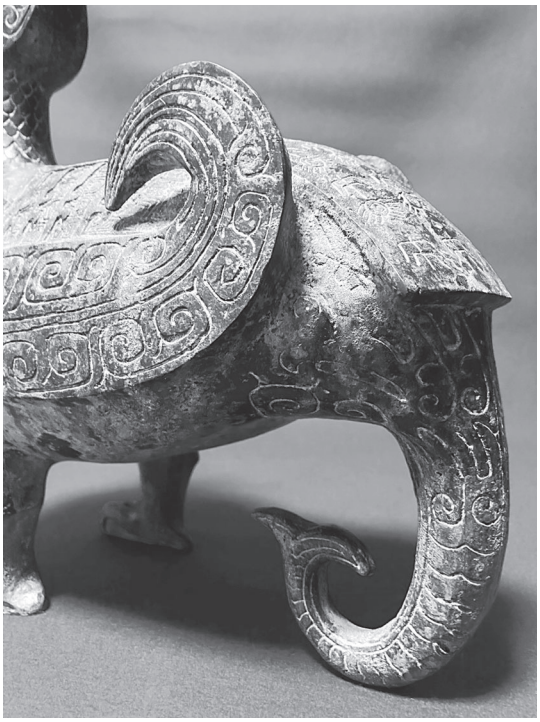
青銅器 A 右側正面



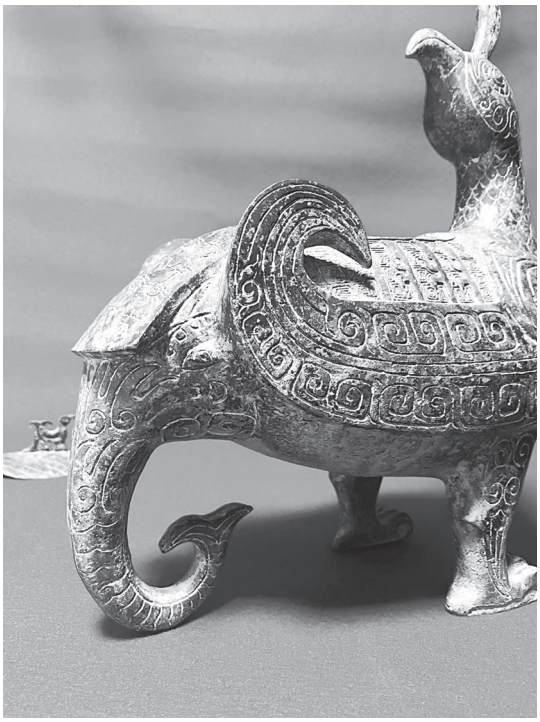
青銅器 A 前方正面



青銅器 A 後方正面



青銅器 A 左象首部分



青銅器 A 右象首部分

青銅器 A 蓋銘文

青銅器 B 蓋銘文

青銅器 B 左側正面

青銅器 B 右側正面

青銅器 B 前方正面

青銅器 B 後方正面

上、青銅器 B 左象首部分
下、青銅器 B 右象首部分